

マルコ・ポーロ旅行記の近刊諸校註本に就いて(下)

藤 枝 晃

目 次

緒 言

一、ベネデット本 (此項承前)

二、同 英 譯 本

三、フランプトン本

四、ムールIIペリオ本

五、シャリニョン本

六、コムロフ本、改造文庫本、其他

5、フラ・ビ、ノ譯本(P)

先づ寫本に就て云へば、ビ、ノの譯したマルコ・ポーロ旅行記は、諸本中最も評判がよくて、廣く行はれたものであり、ベネデットは此本のラテン原本の寫本五十部(従前の調査では二十六部であつた)、外に重譯本七種及び印刷本數種を數へてゐる。本書 CXXXVII—

CXLV 頁に其等寫本及び佚書の一々に就ての叙述が見えるが、其をこゝに更めて説くには及ぶまいが、唯一つ云つて置かねばならぬものは、ベ氏が佚書の中に數へた Welkenauer 男所藏の一寫本である。此は諸種の書目にも見え、地理協會本編輯の際にもルーに依り説かれた事のあるものであるが、其後所在が判らず、ベ氏は「アメリカにでも賣られたのであらう」(CXLII頁)と推測を下してゐた所、先年ムール氏に依り大英博物館の所藏に歸してゐるのが發見された。①

七種の重譯本の内譯は、フランス譯二種、アイルランド、ボヘミア、ヴェネチア、ポルトガル、ドイツの諸語譯各一部である。

ラテン語本の最初の版本は一四八五年頃にアンヴェルスに於て G. Leen に依り刊行された。次で一五三

二年に、前者とは無關係の第二の版本が、Simon Grynaeus の編輯に係る（實際には Huttich 編と云ふ）Novus Orbis に收められて刊行された。此のノヴス・オルビスは更にライネッケ、アンドレアス・ミュラー等の重刊する所となり、後者に基づきフランス、カスチラ、オランダ諸譯本が刊行された。後に説くラムージオ本も此のグリネオ版に據つてゐるのである。

譯者 Francesco Pipino da Bologna は生歿の年は判らないが一二七二—一二三一年の間の公文書に其の名が見える。此の旅記の翻譯の外に、一大史書を編纂し、又一二三〇年に聖地巡禮を行つた事が判つてゐる。彼が此の譯本を書いた時期はマルコの死後であつて、而してニコロ及びマテオの存生中であつた。

内容に就て云へば、此のP本は系統からはVA系に屬するわけであるから、F本・原本との關係はVAの場合と同様の事が云へるわけであるが、一面VA系の他の本に見えぬ材料が多く含まれてゐる。善く出來た節略本からの翻譯であつて、物語の内容は忠實に傳へられてゐるが、文章の調子は相當ひどく變り妙に勿體ぶつた筆致で書かれて居り、又譯者のカトリック思想

に基づく歪みがある。F本やポーティエ本と全く異つた區切り方が施され、全書が三卷に分けられてゐる。②此の系統の本は、ラテン語で書かれてゐた爲と、法王廳の公認本であつた爲に、先に述べた如く流布頗る廣く文化史上に寄與したことは著しい。一例を挙げれば、今日セヴィラのコロンブス文庫に保存されてゐる有名なコロンブスの書き入れ本といふのは實に此系統の一本である。

6、Fに至る以前の狀態

此の章はラムージオ本及びその校訂の材料となつた諸本を論じつゝ、旅行記の原形の歸納推測に及ぶ、べ氏の議論の核心たるものであつて、我々に最も興味深い章である。

ラムージオ本（R、Z'）

ラムージオ Giambattista Ramusio（一四八五—一五五七）はヴェネチアの人、地理學者として令名あり自宅で塾を開いてゐた。彼の「マルコ・ポーロ旅行記」のイタリア語譯本は一五五九年ヴェネチア刊の「旅行

記集成」第二卷に收められて出されたが、これは彼の歿後の出版で、此の叢書の第一、三卷は之より先に刊行されてゐた。其後此の叢書が重印されたこともあるが、ラムージオ譯の「マルコ・ポーロ旅行記」は久しい間認められずに居り、十九世紀に入つて漸く世の注意を惹いて一八一八年にマースデンの英譯本が出版され、次いで一八二八年バルデリ・ボニ伯の校注本、一八四五年ビュルクの優れた獨譯本、更にそれ等の重印本が最近に至るまで續々と世に出づるに至つた。(詳しくは本書 CXXV 頁に就て見られたる)

此の R 本には、他の系統の本に見えなくて之のみに見える記事が夥しく含まれてゐる。先に一言した様にラムージオは P 本を底本として翻譯をしたのであるが、その外に別系統の寫本を参照して校訂を施したので斯る記事がとり入れられたのである。彼が一友人に與へた手紙に

當ヴェネチア市の名士カー・ギン氏 C^a Ghisi の寶藏に係るもので、多分マルコの自筆と思はれる、もともとラテン語で書かれた極めて古い寫本を借覽して度々参照した。

と見え、又 R 本には二つの序文があり、一は普通のものであり、他は此のギン氏藏本にあつたものである。

R 本獨特の記事は幾多の研究者の注意を惹いたが、その材料たるギン氏藏本とは如何なるものか判らず、又或る疑本に斯る記事を含むものもあつたりして、之が解釋には諸研究者は大に苦しんだ。斯くて或は後人の竄入とし、或は F 本の編輯後に於けるマルコの加筆と考へ、更に穿つては甥のマフェオの追記と説かれたこともあり、彼のユールも「マルコ・ポーロのテキストに關して最も重要な未解決の問題は、ラムージオが斯る追記を引用した寫本を發見することである」と嘆じた程であつた。^④

ベ氏は R のテキストを次の五つの要素に分析した。

即ち、(1) P を底本とし、之に (2) V、(3) L、(4) V B の三本が夫々影響し、最後に (5) Z なる本を参照したのであると。R 本の、P、V、L、V B に見えぬものは多く此の Z に由來し、従前の諸研究者を悩ませた R 本獨特の記事は實に此の Z 本より得たものであつて、これこそ正に右のギン氏の古寫本であることが判つた。此は R 本の性質の究明に、ひいては此の旅行記の問題の解決

に決定的な鍵となるものである。

ゼラダ寫本 (Z)

ベ氏の據つたZ本はミラノのアンブロジオ文庫所藏、Ms. Y. 160 P. S なるラテン語古寫本で、序記に依れば、僧院長トアルドがゼラダの樞機官所藏の十四世紀末或は十五世紀初頃の古寫本を借用して一七九五年七月八日に寫し了へたものである。(後に説くが此の原本が其後發見された)

此のZ本のみに見えて從來他の本に見えなかつた記事をF本及それに類似の諸本と比べて見ると、ZはFよりも善い佛伊混淆文本に依つた逐字譯であることが容易に判る。惜むらくは此の寫本は足本ではなく、初めの三分の一許りは甚だしい節略であるし缺けた部分さへある。併しFの一四八章(ユール本で云へば第二卷七十一章)に當る章から以後、即ちZ本全體の三分の二以上は脱落がなく完全に傳へられてゐる。此の初めに略であつて後に精しくなつてゐることに就て、ベ氏は譯者或は書寫生が最初は節略本を作るつもりで仕事を始めたところが、次第々々に旅行記の面白さに引

摺り込まれて遂には一字一句をも犠牲にするに忍びなくなつて斯様な本が出来上つたのであらうと推測してゐる。前半の節略の部分もFより精しい本に依つて居ることが考へられ、又これが重譯でなくて佛伊混淆文本からの直接の翻譯であることは文章の形から直ちに判る。而してその底本の正しい忠實な翻譯である點に此の寫本の價值がある。F本の誤りや疑しい箇所が之に依り多く正され、地名、人名の寫し方などFに比べて訛のひどくなく祖本に近い形を示すものがある。分量の點から云つても、問題のF本に見えない記事は二百にも及んでゐる。更に興味ある事は、このZに見えてFに見えぬ記事の約六割がラムージオ本に見えてゐる。即ちラムージオはZの兄弟にあたる一本(Z')を參照したことが考へられる。(ゼラダ本を用ひたのではない)。前述のラムージオ獨特の記事の大部分は實に此の本より得られたものであつた。今述べた様に、Zの後半部はどの本よりも正しく完全であるが前半部は梗概に留まる。然るに我々はRを介してZ'の初めの部分を窺ふことが出来るのである。(但し初めの部分と云つてもZ'も初めの方は節略本であつた様で、RとFと

を比べる時Fの一——七四章にはFに見えない記事のRのみに見える場合は稀である）しかもRはZの場合とは反對に、初め程Zに對する注意が強く、後に至る程Zは参照されてゐない。

問題のZ本獨特の記事の特に著しいものを云はう。既にロス卿が指摘したカラホジャの記事、福建地方のクリスト教徒の話、ロシアの話等の他にも、支那の文明を讃へて科學・藝術の發達、洗練された禮儀作法、類ひなき進歩した言語、或は纏足の奇習などを述べた章があり、其他各地の興味深い習俗を述べたものが特に多い事は注意されて宜い。此等に就ては後日改めて説くことゝしたい。

從來の研究者が惱みぬいて解決出来なかつたR本獨特の記事も、此のZ本の出現に依つてその出所が明らかにされたのみならず、F本よりも更に祖本に近い形が之に依つて示され、我々が旅行記の本來の形を考へる極めて大切な手がかりとなるのである。

Z系ヴェネチア語本 (V)

Zに近い關係にあるヴェネチア語譯本がベルリン市立圖書館及其の寫しがアンブロッツ文庫にある。Fの一

——二一九章に相當する部分の梗概本であるが、内容の豊富なことはFGに次ぎ、Fとさほど離れてはゐない。文體より見てラテン譯本よりの重譯らしいが、間フランス語の影響も見うけられるから、兩種の本の合訂本かとも思はれる。誤字も多く、色々缺點はあるが、Fの復原に役立つ場合が少くない、且FにもZにも見えぬ記事が三十許りある。

フェラ、節略本及其類似本 (L)

Vに劣らぬ重要なもので、やはりZからさう遠くない關係にあるラテン語節略本の一群がある。現在フェラ、(北伊の都市)の公共圖書館の外ヴェネチア、ヴォルフエンビュッテル、アンヴェルス等に各一部あり、四者全く同じものである。フェラ、本は十四世紀初頭に筆寫されたものである。此は旅行記の殆んど全部(Fの一——二二六章)の梗概であつて、Fに極めて近い佛伊混淆文本に基づいて書かれたものである。此のFと一致しない箇所はRやZ、Vと一致する場合が多く、やはりラムージオの校訂の材料となつたものゝ一つである。

右に述べたZ・V・Lの三種は同一の祖本より出た

一系統であつて、前號に述べたF・FG等の四群とは別系統をなすものである、更にその内VとLとはZ・Z'より少しく離れた一派と考へられる。原本から今のFの形に至るまでの間には、V・Lを生んだ如き中間形が介在してゐたものゝ様である。

ヴェネチア語改修本 (VB)

ヴェネチアのコレル文化博物館所蔵の一寫本に收められたヴェネチア譯の旅行記は、同じヴェネチア語であつても先のV本やVA本とは異つたものであつて、之と同様のものが更にヴァチカン文庫及大英博物館にもある。此はFに近い本を極めて暢達に譯したものであつて内容はFによほど近い。その譯者は不明である。此本は翻譯といふよりは改作と云つた方が好い程自由に譯され、全體が子供じみた、大袈裟に誇張した書き振りに改められ、原書の調子が著しく損はれてゐる。他の本に見えぬ材料も少々見えてゐるのであるが、同時に譯者が勝手に創作した法螺も混入してゐる。斯く充分信頼出来ぬ此のV本が大にR本にとり入れられてゐるのである。

以上Z・Z'・V・L・VBの諸本は、ラムージオ本編纂の材料となつたものであるが故に重視しなければならぬものである。ラムージオは校訂本編纂にあたつて純正の原書を復原しようとしたのでなく、既刊の諸本より優れた版を作らうと志したにすぎない。かくてP本を以て生地として、その上に知見の諸本を以てぬひとりを施した。ところがぬひ絲になつた補助的な諸本の内にこそ素晴らしいものがあつたのを彼は知らなかつたのである。その結果底本になつたPの大きな缺文や澤山の過誤がそのまゝRに見え、VBを重視しすぎた爲に入れてよくない記事までもはいつて了ふなど、R本は不正確、不完全のそしりを免れない點が多々ある。又R本の章節の區切り方はラムージオの自己流のものである。併しR本の美點とすべきは、翻譯の正しさと右の諸本よりとり入れた貴重な挿入文にある。

要するにR本に種々缺點の多いことは隠れもない事であつて、此本を以て底本とするわけにはゆかぬ。さればとてさういふ缺點の故を以てR本を無視し、Z・L等貴重な材料に依つて重要な興味深い記事が含まれてゐる事を見落してはならぬ。此等はFを原本に近づ

け、豊かなテキストを復原する上に本質的な材料となるのである。

「イマゴ・ムンディ」所収本(I)

アンブロジー文庫所収のチャコボ・ダクイ Jacopo di Acqui 編「イ・イ・ムンディ」Imago mundi seu chronica の中に此旅行記の抜萃が収められてゐる。系統から云へばLBに近いものであるが、篇中各地の習俗に關する記事が多い點は、Zと共に注目さるべきものである。以上ベ氏が其の時までに知られた寫本の悉くを検討して歸納し得た所は次の通りである。

従前の考へではF本は原本のまゝのものであつて、P本やR本に見える様な記事は、或はマルコの追記したものと、或は後人の偽作とされてゐた。併し事實は、原本の上に斯る書き加へが行はれたのでなく、反對に原本は最も詳しい、記事の豊富なものであつて、傳寫の間に次第に節略化し、貧弱になつたものである。Z・V・Lの諸本はその事を實物の上で證明する屈竟の材料であつて、而も其等の根柢には佛伊混淆文本があつた事を示してゐる。今日我々が接し得るものゝ内ではやはりF本が内容から云つても、體裁から云つて

も原本に最も近い善本である。さればとて、之に他の寫本や編纂本を参照しても到底ゼノヴで作られた祖本の舊に復することは出来ないくらゐ、損はれてゐるのである。

之に續いた第七章には諸種の殘本及び此の旅行記の當時の文化に與へた影響が論じられてゐる。前者はここに詳説する必要はないと思ふし、後者は別の機會に全文を翻譯したいと思つてゐる。

寫本の傳承を論じた「序論」は大略右の通りであつて、之に續いて本文、補注、牽引がある。

本文はF本即ちパリ國民圖書館所藏寫本 fr. 1116に校勘を施したものである。先に一言した様に、此寫本は獨特の變態フランス文で書かれ、綴字法も正則ではなく、誤寫もあり、又以前に地理協會が出版したのも校勘は甚だ不十分なものである。ベ氏本では此等の誤を一々正し、各頁の脚註の校勘記を二段に分け、其の上段は細字で以てパリ寫本と地理協會刊行本との字句の異同が記されてゐる。下段の校勘記は太字で以て諸本に見えた佚文を注記したものである。但し此等は

主要なものに限つたもので、すべての寫本との異同を悉く記したものではない。斯様に一頁を本文と二種の校記とに區切つて、非常な苦心を拂つた編輯ぶりである。而して卷末の補注は、長文の校勘記の本文中の校勘記の欄に收められなかつたもの及び本文の各章が「序論」の何處で論じられてゐるかに對する索引となつてゐて、後者は特に重寶である。

編輯に就て、一言非難されねばならぬことは、章節の區切り方がF本獨自のものであつて、他本との参照に甚だ不便である。殊に本書はテキストを主としたものであり、ベ氏は東洋學者でもない爲に、註釋がつけられてゐないから、當然、他の註釋本と照し合す場合が多いわけであつて、一層それを附ける必要があるのである。ペンザー氏がユール本との章節對照表を作つて The Asiatic Review Vol. 25, No. 81, (Jan. 1929) pp. 54—55 に掲げ、又同氏編のフランプトン本の各章毎に、それに對應する諸本の章を示してゐるが、一々此等を繰るのも厄介至極である。(私は此の稿の末に諸本章節對照表を附けるつもりでゐたが、近く出るユールペリオ本にはそれが附けられるとの事であるから、今

は載せないことにした)

斯くベ氏の研究はマルコ・ポーロ旅行記研究上、ひいてはフランス、イタリア文學史研究上に大きな革命を齎したものである。隠れたる貴重な寫本を再び明らかに持出し、最善本たる所謂地理協會本なるものゝ性質を從來とは異つた立場から認識して旅行記の原形を示唆し、且從來謎とされてゐたラムージオ本獨特の記事の根源を探りあてる等、旅行記のテキストに關する問題の核心は解決されたと云つて宜い。一度び本書が現れるや、踵を接してペンザー氏編む所のフランプトン譯本が出で、更にZ原本の發見となり、今やベ氏のテキストに就ての所論の上に立つた老大なユール＝ペリオ校註本の出現を見るに至つたのである。

二、リッチ英譯本

本書の本文はベネデット氏が自ら現代イタリア語に翻譯したテキストに就いて故リッヂ氏が英譯したものであるが、出版の運びに至らずしてリ氏は歿し、デニソン・ロス卿が之に序文及索引を附して彼とパワー氏との共同監修に係る The Broadway Travellers 叢書

中の一冊として出したのである。

我國では、難解且入手困難なベ氏の原本を引用する代りに此が利用される場合が頗る多い様であるが、實は此は引用に用つては相當注意を要するものであることを言はねばならぬ。即ち今述べた様に、改譯文に基づいた普及版であつて、ベ氏本のクリティカル・テキストのまゝの翻譯ではない。ベ氏本では、前に述べた通り地理協會本を底本とし、其と他本との異同を調べた綿密な校勘記が附してあつたが、此の英譯本では肝心の校勘記は省略されて、地理協會本の文章は改められ、他本に見える佚文が本文の中に織込まれて居り、原書の形が著しく損はれてゐる。章節の區切り方や題名も原書とは異り、殊に章節に番號が附いてゐない事は原書或は他書との参照に當つて頗る不便である。次に譯文に就て言へば、原文に必ずしも忠實であるとは限らぬ様で、多少の誤譯があるのを敢て訂正せずに残したのもあることが序文にも見える。

ロス卿の簡單な序文の他には、註釋は附けられず、たゞ索引中に於て古今の地名が對照されてあるのみである。

もと／＼此の譯本は嚴密に學術的に作られたものでないのであるから、他本と同列に扱ふのは或は當を得てゐないであらうが、屢々引用されるものであるからこゝに一應論じたまでである。本書のとるべき點は、厄介な極な地理協會本の佛伊混淆文が平易な英文で讀めるといふ點にのみある。此の點は我々はベ・リ兩氏の勞力を多とせねばならぬ。但々原書との對照が其の場合絶対に必要である。

三、フランプトン英譯本

ベネデットの名著が出されて後間もなく、ペンザー氏の編輯に係る「マルコ・ポーロ旅行記」のフランプトン英譯本が世に送られた。編者ペンザー氏は英國の東洋學者で十一世紀頃のカシミールの人ソマデーヴァ Somadeva の Kathā Sarit Sagara ストーリー Tawney の手に成る英譯本 The Ocean of Story をやきに編輯して知られてゐた人である。

此のフランプトン譯本はスペイン語からの重譯であつて、マルコ・ポーロの外にニコロ・デ・コンチの旅行記も併せて一冊に收められてあり、而してペンザー氏

の序文、注釋が添へられてある。此の重刊本發刊の理由としてペンザー氏の述べる所は、エリザベス朝時代の「マルコ・ポーロ旅行記」の英譯本といふことと體が珍重に價する事であるのみならず、原刊本は今日頗る稀覯に屬し、僅に三部を存するのみであつて、これだけでも重印の價値はあるのであるが、更に次の如き諸理由にも依る。第一には文學史研究の上からは原本のエリザベス時代風の綴字法、欄外の見出し、花文字等を示すことは興味のあることであり、次に「マルコ・ポーロ旅行記」のヴェネチア譯本（ベネデットの云ふVA系）の標本として見ても面白い。更に第三には寫本の系統に就てベネデットに依り新説が唱へられたので之に依る舊説の再檢討が必要であり、最後には近來の中央アジア學の進歩の結果、マルコ・ポーロの行程に就ての舊來の研究が再檢討されねばならないと云ふのである。斯様な次第で本書は原刊本の古雅な面影が存され旅行記の本文には手が加へられてゐない。

原刊本は一五七九年一月にニューベリーR. Newburyの發行する所で、其後版權は他に移つた。譯者フランプトン John Frampton は久しくスペインに住み、一

五七六年に英國に歸り爾後一五八一年までの間に六種のスペイン書（主として東方關係の書）を翻譯した。些か餘談にわたるが、煙草を初めて英國に齎したと普通に云はれてゐるドレークよりも早くに英國で喫煙してゐたとのことである。歿年は確かでないが、一五九六年頃迄は生きてゐた様である。

フランプトンの據つた本はVA系のサンタエラのカステラ（スペイン）語譯本である。此本は前回二四一頁系圖にCastelとあるものでルッカ Lucca 官立圖書館所藏の一ヴェネチア語寫本と内容が似寄つたものであつて、全體が一三五章に區切られてある（フランプトン本も同じ）。譯者サンタエラ Rodrigo Fernández de Santella y Córdoba は一四四四年セヴィラの東北なるカルモナ Carmona の生れ、ボローニヤのコレッヂに學んで學位を獲た學僧である。歸國後僧正補佐の任に就き、セヴィラ大學の設立に奔走し、一五〇九年に死んだ。近く一九〇〇年に至り其の大學に彼の像が建てられた。「マルコ・ポーロ旅行記」の翻譯は一四九三年に完成したのであるが、初版の出版は一五〇三年である（於セヴラ）。其後一五〇七年（於トレド）、一五

一八、一五二〇年（於セヴィラ）、一五二九年（於ロクロ）に續々と重印されたが、今は何れも稀覯になつてゐる。

話はベンザー氏編輯本に戻るが、これの序論は三部に分れ、一はフランプトン及びサンタエラの傳記、二は寫本の傳承、三はマルコ・ポーロの行路に就ての研究である。二の「寫本の傳承」といふのはベネデットの大作を極めて手際よく要約して紹介したもので、彼が前に *The Asiatic Review* に載せたものとほぼ同じである。三の行路の研究はスタインの地圖を利用するなど、最近の諸研究の結果をとり入れてなか／＼よく出来たものである。之に就ては石田幹之助氏が述べられたことがあるから（史學雜誌四四ノ一、一〇四頁）、就て見られたい。

旅行記の本文は先に言つた様に章節の區分、花文字其他に原刊本の體裁を存してゐるが、各章ごとに諸校註本のそれに相當する章を示してゐるのは頗る便利である。

附録の一はフランプトン本のテキストに就ての注釋である。校勘と固有名詞の解説を主としたものである

が、習俗に關する説明もあり、それに於ては編者の宗教・土俗に關する博識に依り啓發される所が多い。ただ注釋が節略本であるフランプトン本のテキストに限られてゐるのが物足りない。附録の二はラムージオ本其他に見える興味深い記事のフランプトン本に洩れたものを數十條、八十頁にわたつて集録したものである。最近に此本の再版（普及版）が出たとの知らせを受取つた。（A. & C. Black 發行、價は十八志）

四、ムール＝ペリオ共編本^⑧

本稿の前篇が印刷を終つた日に此の本の出版の知らせに接した。第二卷が先づ出ただけで未だ全部は出てゐないが、出版案内を見ると其の内容は大に期待を持たれるものであるから、こゝに其の大概を傳へておかう。

全篇は四卷に分たれ總て千三百頁、圖版八十といふ大冊で、四五〇部の限定刊行とのことである。

既出の第二卷といふのは問題のゼラダ寫本（Z）である。ベ氏のミラノで發見した本は先に述べた様にトアルドが寫したものであつて、此の寫しは大體に於ては

厳正であるが多少の誤があつた。ところがトアルドの據つた原本のゼラダ寫本を一九三二年にサー・パーシヴァル・バグダッド Sir Percival David がトレードに於て發見した。^⑨此を版に附したものであつて、此の卷のみは兩三年前に既に印刷されてゐたとの事である。

第一卷は序論・本文・附録より成る。本文はF本の英譯に諸本に見える佚文を添へたもの。序論は寫本の傳承の概説、特にF・Z・Rに就ての詳しい解題、デニソン・ロス卿の筆に成るZの解題、ポーロ家の系譜マルコの經歷の研究等より成る。附録は「諸本章節對照表」「寫本一覽表」及びマルコ・ポーロの經歷・財産に關係した諸文書の寫し等である。寫本一覽表には一四三部を録するとあれば、ベ氏の調査したよりも五部を増してゐる。其の内一部はムールの發見したもの、一部はZの原本、一部は後に説くアドモント本であることは明らかであるから、他に二部従前未知のものが含まれてゐるわけである。

第三卷は註釋・索引で(a)は、G. Bing, Percival David, George Hill, R. Krautheimer, H. Burchthal, P. Pelliotの諸氏の論文、(b)は主としてペリオ氏の手になる地名・

人名・東洋語等四百餘の項目に就ての註釋で、アラビア字・漢字も用ひられて印刷されるとの事である。(c)は同じくペリオ氏主編の研究書目で、日本・支那の論文も含まれ、最後が(d)索引である。

第四卷は圖版及び地圖に充てられる。

右の様な内容であるから續刊の一、三、四卷にも大きな期待が持てる。第一には厄介な地理協會本が、充分信頼し得る英譯となつて出ることであり、次には第三卷の(a)論文や(b)註解はユールコルディエ以後今日迄に進められた東洋學の總和を示すものであらうし、又第一卷のマルコ・ポーロ或はポーロ家に關する研究は、従前全く暗黒であつたと云つても宜い程の此の問題について大きな燈明を點するものゝ様に見うけられる。

ベネデットは彼の大作の卷頭に於て、マルコ・ポーロの研究には三つの基礎的な問題がある、テキスト、註釋、マルコの事蹟が是であると説いた。即ち旅行記の原本は失はれて居り、我々の前には後人の手に成る百數十に及ぶ互に異つた寫本があるのだから此等の材料で以て旅行記の本然の、純粹のものを歸納すること

は第一の急務でなければならぬ。次に此の大著の地理的・歴史的註釋を必要とする箇所は無盡藏であり、且舊來の註釋の批判されねばならぬものゝあることは更めて説くまでもないことである。最後にマルコの經歷、歿年、名聲、財産、或はポーロ家の事情等に就ては、具體的に云へば、元の朝廷でマルコは如何なる任に就いてゐたのか、クルゾラの海戦でマルコはどんな役を勤めたか、どういふ事情でゼノワの獄に繋がるに至つたのか、ヴェネチアに歸つて後は何をしてゐたか、其後のポーロ家は如何であつたのか何一つとして確かに判つてゐない。此等の問題の内第一に就いてはベ氏に依つてほぼ納得のゆく程度に解決された。而して第二第三の問題に就て此のムールⅡペリオ本の寄與する所は、編者等の學識と本書の篇目とから見て、頗る多大であることが思はせられる。

ベネデットの劃期的著述に續いてはベンザーの雅趣豊かな佳篇や後述のアドモント本が現はれ、今又マルコ・ポーロ研究の總決算を意圖したとも見るべきムールⅡペリオ本が現れようとしてゐるのであるが、ベ氏

本以前の二三の著述にも一言觸れておきたい。

五、シャリニオン本

著者シャリニオン Antoine J. H. Charignon (一八七二——一九三〇) はフランス、シャトー・ドゥブルに生れ、一八九八年に鐵道技師として支那に渡り「北京地圖」を以て名高いブイヤールと同時である、雲南・京漢・隴海諸鐵道の建設工事に従事して、一九〇八年には支那政府の技術顧問に任じ、其の方面に關する著述もある。世界大戰の際に歸國從軍し、次いでシベリア出兵にも加はり、退役後北京に居を定め支那學の研究を始めて、一九二四・二六・二八年に此の三卷の書を順次世に送つた。

此書の本文は、ボーティエのそれを現代フランス文に書き改めたもので、支那に住んでゐて諸寫本校合の便を持たぬことでもあり、寫本の傳承に就ての新研究も現はれる以前のことでもあるから、これは已むを得ぬことゝは言ひ乍ら、此の點に大きな缺點を先づ認めなければならぬ。シャ氏が最も力を注いだのは註釋であつて、支那史籍を多く利用し、張星烺其他民國の學

此の研究を取入れ、且印刷には漢字を挿入して異色を誇らんとした。私は此等の註釋の全部について検討したわけではないが、私の見た限りでは其の註釋は甚だ物足りないものであり、過誤も二三ならず見うける。

其等の一々に就ては後日述べる機會もあらうし、又ペリオ氏も通報二五卷誌上で數例を擧げてゐる。なほ此の註釋は漢文史料の利用に重點をおいた爲に支那以外の方面に關しては見るべき所がない。要するに本書は支那に關する註釋には多少とるべき點がないでもないが、從來評價されてゐた程に高く買ふべきものではないと考へる。

六、コムロフ本、改造文庫本、其他

改造文庫版「マルコ・ポーロ旅行記」の出現に依つて我々は邦文に譯された此の大旅行家の紀行に極めて手輕に接し得る様になつた事は甚だ結構なことゝ言はねばならぬ。しかも譯文が極めて見事であるのは二重に結構である。然し乍ら本書の底本となつたコムロフ本なるものはベ氏の大著出版以前のものであり、且コムロフなる人は東洋學者でもない様で、此のテキスト

は學術的には高く評價するわけにはゆかぬ。此本はユール本とマースデン本とを彼此參酌して作つたものである。更に詳しく言へば章節の區切り方はユール本に従ひ（註釋の參照に便なるが爲に）、本文は寧ろマースデン本を多くとり、而して後者に缺けた第四篇をユール本よりとつたものである。故にラムージオ本獨特の記事は全部とり入れられてゐるが、校訂者が尊重するマースデン本は先に述べた様に亂雜を極めたラムージオ本に據つたもので、しかも此の校訂はラムージオ本に關する正しい認識の上に立つて行はれたものでない事を注意しておかねばならぬ。なほ本書の隨處にある簡單な註記は誤が多い。

こゝで考へられる事は、普及本として望ましいものは斯様なコムロフ本でなく、ベ氏版なりムール・ペリオ版なりのF本を底本とし之にR本等の佚文を挿入して文學者の流麗な筆で邦譯されたものである。或はリツチ本を校訂を加へて用ひても宜いかと思ふ。

*

チャルナー編の中世獨逸語譯本といふのは未だ實物に接しないが、十四世紀前半に中世東方獨逸語に譯さ

れ同世紀後半に書寫されたL A系の節略本がアドモン
ト僧院文庫で發見されたのを編輯したものとの事であ
る。

其の他最近に出たエヴリマン文庫本、ノイマン獨譯
本等はラムージオ本の翻譯であるから更めて説く必要
はなからう。

以上述べた如き校註本以外に此の旅行記の一部分に
就いての註解、或は之を利用した論文の類に至つては
數限りないと言つて宜いほど現れてゐる。ペリオ氏が
斯る論文の目録を作る筈であるから委しくはそれに期
待することゝしたい。

此の旅行記の北支那の部分の新出テキストの舊註解
本に見えぬ記事、及び舊註解本の解し至らざるものに
就て愚見を述べたいと思ひ、その前置きの意味で本稿
を草したのであるが、先に述べた様に近くムール、ペ
リオ兩氏監修の校註本が出ることになつたから、暫く
其を保留し、此本が出て後に筆硯を新にして稿をつい
けたう。

註

① A. C. Moule, A Lost Manuscript of Marco Polo.

(JRS 1923, pp. 406-8).

② 更に詳しく云へば、第一巻はFの一一六七章に、第二
巻は一二五章迄に第三巻は一五八章迄に相當する。

③ Secondo volume delle Navigazioni et Viaggi nel quale
si contengono l'Historia delle cose de Tartari, et
diversi fatti de loro Imperatori, descritta da M.
Marco Polo Gentiluomo Venetiano et da Hailon
Armeno.

④ Yule-Cordier, Travels of Marco polo, Introduction
p. xiv.

⑤ 詳しく云へばFの三十六章は甚しい節略、五十二章サ
マルカンドの條は大部分が省かれ、又六十四章半ばか
ら七十一章へ、七十六章から一〇五章へ、一〇九章から
一一一章へ、一二二章半ばから一二五章末へとび、一三
一、一三八、一四五、一四七の各章は途中で切れてゐる。

⑥ 此本はデニン・ロスも見てゐないと言つて居り、稿
本であつて刊行されてはゐないのかと思ふ。

⑦ リッチ英譯本序文

⑧ Marco Polo, The Description of the World Translated and Annotated by A. C. Moule and Paul Pelliot.
Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, 1926, Comptes Rendus, pp. 84-5. Le Temps の同年四月十日號及び
The Times. 四月四日號に其の事は詳しく。